

医事万華鏡

本年2020年は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、これまでのわれわれの社会、生活の在り方に大きなダメージを与えました。ただ、奇しくもこれは日本政府が予てより提唱してきたSociety5.0の実現を後押ししているとも言えます。

そのSociety5.0という概念は、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムによって、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）を意味します。社会はこれまで狩猟社会（Society 1.0）から農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）を経て、現代の情報社会（Society 4.0）へと発展してきたと考えられています。ただ、Society 4.0では知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題がありました。また、多種多様な情報から正確な情報を見つけ、分析する作業が負担であると共に、まさに今日の社会が抱える少子高齢社会の中で人材不足を解消し、経済発展の限界を乗り越えることが大きな課題として指摘されるようになってきました。

これらの課題を解消するため、日本政府が第5期科学技

術基本計画にて「目指すべき未来社会」として提唱したのがこのSociety5.0です。これが実現すれば、社会はI o T (Internet of Things) により全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報の共有が可能になります。また、人工知能

(AI) により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化や地方の過疎化、さらには貧富の格差などの課題も克服されていくとのことです。こうしたデジタル革新を通じて新たな価値創造が生まれることで、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合える社会、一人一人が快適で活躍できる社会になると考えられています。

さて、with コロナの時代は、テレワークやオンライン授業、遠隔医療などテクノロジーを活用したサービスが一気に広がりを見せています。感染症という意図せざるものがトリガーになったとはいえ、政府の計画通りに社会が変化しつつあり、まさに新たな秩序に収斂していく様を目の当たりにしている感があります。なるほど、「予定調和」という概念を提唱したドイツの哲学者ライプニッツもまた、全てを調和的な考えによって見積もっていました。

そうであればこそpost コロナの時代は、より一層デジタル化、オンライン化が進み、先進的な医療技術・制度の下で、あらゆる人々が希望を持って活躍できる、まさに「Society 5.0」という調和に向かっていくのではないのでしょうか。

(JMS主幹・野村元久)

